
9年目越しの想い

馬虎兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

9年目越しの想い

【Nコード】

N6714C

【作者名】

馬虎兎

【あらすじ】

キミの隣には、ボクじゃなくカレがいる。心にポツカリと穴が開いたように、何かが無くなった。あんなに一緒に時を過ごしたのに。

く七夕く

『おめでとつ』

心にも無い事を、言った。

今日は、キミの結婚式なのに心から祝えない。

今、キミは素敵なカレを見つけ、友人から祝福を受けている。

ボクは、そんなキミを一步輪から離れて見つめていた。

あんなに一緒に時を過ごしたのに、キミの隣にはボクじゃなくカレがいる。

何故か、悔しいと言った感情は無かった。

ただ、ポツカリと穴が開いたように、何かが無くなった。

ボクとキミが、初めて逢ったのは9年前。ありきたりな友人の紹介だった。

まだ当時はボクも17歳で、キミは一つ下だった。

『高校生』 そんな響きも懐かしくなる年齢にもなったと思う。

初めて逢ったとき、年下の割には大人っぽい子だなあって思った。

正直、一目惚れだった。

まだ、女性と付き合った事の無かったボクにとっては、『高値の花』。

それがキミの印象だったよ。

『恋はするものじゃなく、落ちるもの』 何処かで聞いた台詞。

まさに、それだった。

ボクはキミにこの言葉のように、『恋に落ちた』。

思春期のボクはなかなかのヘタレで、女性の接し方が解らなかった。

どんどんキミの事を好きになって行くのだけは解っていた。

そして、無謀な告白をしてしまった・・・振られた。

解っていた事なのに、自分で自分を傷つけて、キミとの接点を失った。

まさに『自業自得』。

新婦の友人で男はボクだけ。元職場の人間はもちろん男性もいる。

今の時代は新婦が男友達を呼ぶのはそんなにダメじゃないらしく、

ボクは女友達とともに、結婚式に出席した。

純白なドレスにいつものメイクとは違うキミが、ベールの下で少しつつむき、

ボクの横を、おじさんと一緒にゆつくりと通り過ぎた。

素直にキレイだった。

最近購入したデジカメ。この日のために買った用なもの。キミをたくさん撮るために。

液晶から写るキミはとても綺麗で幸せな顔。カレを見つめる、その顔がとてもいい表情をしていた。

キミは、ボクに気付き、笑顔でボクの元にやって来て

『ありがとう・・・』

・・・『おめでとう』

自分の言葉に、心が軋^{きし}む音が聞こえた。

非現実なことを思ってしまう。ドラマやマンガみたいに過去に戻れたら・・・なんて。

告白をして半年が過ぎ3年生になった。それなりに引きずっていただけ半年もたてば、どこか心の奥に閉まっておける。

高校生なんて頭の中の半分は『恋に恋してる』ような生き物だから（ボクは特にそうだった）次の出会いを探していた。

その日は、隣町の七夕祭りでキミの通っていた高校の文化祭。

『・・・そんな事ありえない。ドラマじゃあるまいし。』『七夕だからって』『冗談じゃない』

期待していた。

ボクは友達と、文化祭に薈《出会い》を探しに出かけた。

うろちよろしていたら、『ボクとキミ』の仲介人のマサルを見つけた。

マサルは『キミ』と同じ高校で、ボクと同級生だ。マサルは何やら悪い顔をしてニヤニヤしながらボクに近づいてきて、

『2 B』それだけ言って、また自分のクラスに戻っていた。

『ムカツク』心の中を見透かされた気分だった。

忘れようとしていたのに文化祭なんかに来たのが、そもその間違いで、そんな事を言われれば余計に意識して探してしまう。

なるべくその教室には近づかないようにして、グルグルしながら校舎を見て回った。

まあそんな意識して歩いてればどうしたって似ている子には目が行き、見つけるのはそんなに時間はかからなかった。

『よっ、久しぶり』としか出てこなかった。

『久しぶり〜』キミは何も無かったかのように、自然に振舞い、笑いかけてきた。

僕の中の『キミ』と書かれた心の引き出しは簡単に引き出され、半年前の想いが溢れ出てきた。

半年前の出来事が何も無かったかのようにキミはボクに話しかけ、ボクもそれに合わせたかのように、

内容の薄い話をして、別れた。ボクは心の底からヘタレだ、確信した。

また遭遇してしまうのが嫌で、友人に無理を言って帰る事にした。

だが、その日は七夕祭り。気分を変えてまた新たな場所で蕾を探すことにした。

祭りに来たのはいいけど、ヘタレが二人。ナンパなんてものはしたことがなく、出会いもあったもんじゃない！

当然、収穫は0。夜も遅くなり、トボトボ歩いて疲れたので帰る事にした。

（この日は七夕、空を見上げれば、満天の星空。織姫と彦星はこの日を待ちわびたに違いない。）

奇跡は起きた。

『あれ？偶然！』

少しハスキーだけど、女性特有の高い声が、斜め後ろからボクの肩を叩くと同時に聞こえた。

キミがいた。

（おいおい、ドラマじゃねーぞ。）そんな声が聞こえてくる。

一日に二度も会って、運命？織姫と彦星に感謝すらしたくなる。

二度目の再開は、話が弾んだ。昼とは違い、祭りが後押しするかのように、自分でもビックリするくらい話をした。

話の内容なんて覚えちゃいない。ただこの時間が楽しくて、夢の中にでもいるかのようだった。

現実の違い、帰るときになった。『帰りたくない、また逢いたい』そんな気持ちが渦巻いた。

『今度・・・』

自分でも驚いた。ヘタレなボクがキミを誘っていた。

『今度・・・みんなで遊ぼうよ。』

所詮、ヘタレ。一度振られて臆病になっているのか、二人で遊ぶ勇氣は無かったらしい。

『いいよ。じゃく来週のこと。』

また、キミとの道が繋がった。

夏のある長い一日々 昼 (前書き)

キミの隣にはカレがいて、ボクじゃない。

キミと再会したあの夜、ボクは偶然じゃなく、
運命的なものを感じたよ。

夏のある長い一日、昼

『明日から、夏休み。何してやるか。』

なんてバカなことっている高校3年はボクぐらいだろうか？

高校3年といえは受験勉強で、大変な時期なのに、ボクは余裕だった。

進学校でもなかったけど、大学に行く人はもちろんいて、ボクの周りの友人も進学が希望だった。

しかし、ボクは余裕！なぜなら進路の事で担任に、迷惑をかけたことが無い為か、

すでに専門学校の推薦枠を貰い、クラスの中で一番最初に『自由』を獲得したのだ！！

だが、そんな自分も受験勉強なんかよりも大変な時期だった。

七夕祭りの帰りに、『ボクとキミとみんなで遊ぶ』と言うプレミアムアチケツトを手に入れたのは、

いいけど、何をどうして遊んだらいいのかが解らない。そして出た答え！

『やっぱり、夏休みに入ってから遊ぼうよ！』

本当に、反吐へどが出るくらいのヘタレっぷり……。

この9年間、もちろんボクにもそれなりに『彼女』と言う人はい
た。

でも、キミの事を嫌いになったわけでもなく、忘れたかった訳でも
ない。

今、思えばキミとの関係をいろいろな意味で発展しなくなかったの
だと思う。

『このままで・・・いい』

付き合ってきた彼女達の事は、もちろん好きだった。でも心の中で
は、

いつもキミは特別だった。

そのドレスも、指輪も、誓いのキスも、キミの笑顔も、全部ボク
が与えてあげたかった。

ボクが9年かかって、出来なかった事を1年半でキミの隣にいる
カレが成し遂げた。

酒の席で交わした約束。

ボクに投げかけて来たキミのあの言葉。

『お嫁に貰ってよね!』

『お互いが余ってたかな。』

酔っていたとは言え、正直、嬉しかった。

キミは冗談だったかは解らない。けど、ボクは強がった言しか言えないくらいに、

照れていて、キミの顔を直視できなかった。

『眠れない……。』

もう自分から逃げる事は出来ない。嬉しいはずなのに、半年前の記憶が甦る。

7時間後には、キミと会えるのに、考える事は無様に終わったあの日の出来事。

遊ぶと言っても、キミと二人じゃない。ヘタレ2号もいる。

不安と喜びと期待が飛び交う中、

頭がオーバーヒートしたのか、気がついたら朝10時。

いつの間にか寝ていた。

高校生の脳会議はあまり長い時間は向いていないようだ……。。

お昼過ぎにミツルがボクの家を迎えに来る。

『ミッル』はヘタレ2号。こいつは定時制の高校のため、車の免許を持っている。

『・・・便利なヤツ』

まだ冷房が効いてないクソ暑い車に乗り込み、『ユキ』の家に向かう。

キミとユキは家が隣同士で幼馴染だった。

キミとユキはもう家の外で僕たちを待っていてくれた。

『おまぢい〜』

ミッルが言うと、

『遅いよー!!』

ユキが冗談交じりに言うと、ミッルのおでこを『ペッシー!』

ここは関東でも田舎の県で都会のように遊ぶ場所が少ないので、

行く場所なんて、いくつも無いので大体決まっている。

ボク達は昼間から、カラオケに行く事にした。

5時間コース。

ボクはこの後どーするのが、非常に気になっていたその時、

『メシは?』

バカな聞き方でミッルが、突破口を開いた。こんなときはバカで助かった。

『まだ、キミと一緒に時間が過ごせる。』

夏のある長い一日、夏の風物詩（前書き）

暑い一日が始まった。

ボクとキミと友人二人でダブルデート。

ウキウキな昼間の時間を過ごした。

夏のある長い一日、夏の風物詩

『この後どうしよーか？』

ボク達は夕食を食べ終えると、

ユキの提案で非常にベタだが夏の風物詩『肝試し』に行くことにした。

『ミツくん、知ってる場所ある？』

『俺、オススメ知ってるからそこでいい？』

そこは隣の県で、山の中のトンネルだった。

昔、車線を増やすためにもともとあったトンネルの隣にもう一つのトンネルを作っている途中、

作業中に事故があり多くの作業員が亡くなってしまった。

その後、トンネルを通ると心霊現象に遭う用になり、地元の心霊スポットに今もなっている。

こんな場所に行く連中はだいたいは靈感がない奴が多くて、ボク達もその部類だった。

『どーする？塩でも買っていく？』

『懐中電灯はあるの?』

『ZIIPPOでもいい?』・・・良くないから。

正直、ボクは苦手なほうだった。特に靈感が強いわけじゃないけど、その場所によつては背筋に悪寒を感じることもあって、今まではなるべく心霊スポットに行くのは避けて来たのだ。

『もうそろそろトンネル。』

ミツルが言うと、キミは、

『ちょっとドキドキしてきた〜!』・・・楽しそう。

情けないけどボクのテンションは急降下していた。

『あー帰りたい』心の中で何回つぶやいたことが。そんなボクの気持ちも知らずに、ミツルがワクワクしながら、

『通るよ〜!』・・・・・・・・・・・・・・・・。

何も起こらない。

そんな簡単に何か起きてもらっても困るけど、拍子抜けして、『はあ〜。』とつ、緊張の糸が切れると、

『実はもう一つ。』

『事故があつた方のトンネルがあるんだよねえー。言つてなかった

けど、当時の事故からそのままになっていて、さっきのトンネルの隣にまだあるんだよねー！』

『本当ー！？』

『どーする？行っちゃうかい！？』

『いっちゃうー！』x2

・・・『マジですかぁ。』

来た道に戻るためにUターンをして、またトンネルに向かった。

夏のある長い一日／夏の風物詩（後書き）

長い夏の、暑い一日。

ボクがキミとの距離を縮めたこの日。

ボクは、この日が無かったらキミとこんなにも長い時間を過ごせては無かったと思う。

馬虎兔と言います。

不定期な投稿ですいません。

不細工な物ですが、少しずつ投稿していきます。

良かったらご意見も頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6714c/>

9年目越しの想い

2010年10月20日19時34分発行